

第 68 回 卒業式 学長式辞

2024. 3. 9 学長 西内みなみ

卒業生のみな様、ご卒業おめでとうございます。

今日の良き日は、みな様にとって、特別な記念日となります。

13 年前、2011 年の卒業式は挙げてできませんでした。なぜなら、卒業式の前日が、あの 3. 11 だったからです。短大は仮設の避難所となり、本当に辛く悲しい思い出が、記憶に強く刻まれています。

能登半島に甚大な被害をもたらした地震から 2 か月以上が過ぎました。同じ痛みを持つ私たちは、被災地の復興と被災された方々の平安を心から祈り続けています。

ロシアがウクライナに侵略して、2 年以上がたちます。さらに、2023 年 10 月 7 日に、パレスチナのガザ地区を支配するハマスによるイスラエルへの攻撃によって勃発した、パレスチナ・イスラエル戦争の犠牲者の数は増え続けています。今こそ、人類はその英知を結集して、この試練に立ち向かわなければならない時に、核戦争の危機が年々高まっています。

「わたしたちの平和を守る」という時、「わたしたち」が自分の家族や身の回りの人、同じ国籍を持つ人だけではなく、地球上のすべての人々になった時、初めて、平和が実現します。この地球上で起こる出来事のすべては他人事ではなく、私に関わる出来事だと考え、あらゆる人々と共に歩んでいきましょう。この戦争や地震、感染症で、命を奪われた方々、家族や故郷を失った方々のために祈りましょう。一刻も早く、全ての人々に平和がおとずれますように。

卒業生のみな様は、高校時代と短大の 2 年間、コロナ禍における閉塞的な暮らしの試練に耐え続けてこられました。皆さまの明るい笑顔に接する度に、よく耐えて来られたと感心するばかりです。この限られた条件の中でも、皆さまは「まなび」と「つながり」を本当に大切にしてくださいました。建学の精神である「愛と奉仕に生きる良き社会人」になることを、皆さまは誠実に、そして実践的に学んでくださいました。

一つだけ、小さなことの中に大きな愛を感じたエピソードをお話させて下さい。

ある夕方でした。学長室から出て帰ろうとすると、廊下で事務職の方が天井の電気交換をされていました。古くなり点滅していたのに気がついて新しい物と交換し下さっていたようです。そこに、多分、キャリア支援室に来た学生の一人が、電気交換している職員の方に向かって「ありがとうございます」と一言言って会釈されたのです。職員の方も学生の方を見て、軽く会釈されました。小さな出来事です。しかし、その中に、相手の事を思い合う愛が

込められていて、ステキな瞬間だなと感動しました。桜の聖母短期大学は、こうした瞬間が溢れている学び舎です。

この2年間、私たち教職員に、みな様の成長を共に喜ぶ幸せを頂いたことに、心から感謝します。また、多くの方々が、たくさんの資格と免許を取得されました。本日は、極めて成績優秀・品行方正であった方を、代表として表彰させて頂きました。

こうした見える学習成果を得るための努力には、はかりしれない価値と意義があります。この2年間で、それだけ努力されたという証です。そして、それは、皆さまをご支援させて頂いた教職員の喜びでもあります。

桜の聖母短期大学は、学生一人ひとりが、喜び、賛美し、感謝することを学ぶ、聖母マリアの学校です。みな様が手にされた学位、資格、免許そして表彰を、ご自身の誇りにして下さい。そして、「愛と奉仕に生きる良き社会人」として、これからも誰かのために役立てて下さい。それが、今日まで、みな様と共に、喜び、賛美し、感謝してきた私たち教職員一同の願いです。

卒業生のみな様、今日という日は、これまでの人生の到達点であると同時に、これからの人生への出発点でもあります。これまでの人生への感謝と、これからの人生への希望を旨に、桜の聖母短期大学という学び舎を巣立って下さい。

そして、これからの人生という大海原で、お幸せな時、嬉しい時、楽しい時は、桜の聖母短期大学の事を忘れていて下さい。しかし、あなたの人生で、苦しい時、辛い時、悲しい時には、母校である桜の聖母短期大学のことを思い出して下さい。そして、何時でもいらして下さい。同窓生になられるあなたを、両手を広げてお迎えできる母校で在り続けることをお約束いたします。

保護者のみな様、高いところから、たいへん恐縮ですが、大切なお嬢様のご卒業、おめでとうございます。お嬢様のご卒業まで、多大なるご支援を賜りましたことを、深く感謝します。ありがとうございました。

桜の聖母短期大学は、地域に深く根ざし、創立者聖マルグリット・ブールジョワの心をたずねながら、教育いちずにと「小さな単純な歩み」を続けます。人々から必要とされる「小さくとも教育で輝く」学校で在り続けます。

卒業生のみな様とそこご家族に、そしてこの桜の聖母短期大学に集うお一人おひとりに、主イエス・キリストと聖母マリア、聖マルグリット・ブールジョワの豊かな祝福をお祈りして、式辞といたします。